2016年度 聖学院大学総合研究所 カウンセリングシンポジウム　報告

上段：会場内の様子
下段：堀肇牧師 藤掛明准教授（研究代表）村上純子准教授

2016年11月11日（金）に、聖学院大学ヴェリタス館教授会室において聖学院大学総合研究所カウンセリングシンポジウムが、「物語に学ぶ心の世界<生きるための知恵>」のタイトルのもと、44名の参加者により開催された。当日は、藤掛明研究代表の司会により、「ミハエルが格闘し、アナグマが心静かに手紙を書き、謎の教師が不気味に笑う」、ファンタジー世界が、人生・愛・大切なひとに残していくもの・怒りの表現、をてがかりに解き明かされ、知恵の多様なあり方と受け止め方が論じられた。

堀肇氏（総合研究所特別研究員）は、物語を取り上げた。トルストイの『人は何で生きるか』に登場するミハエルは天使であったが、神からのいいつけに背く。そのミハエルに神が告げたことは、「三つの言葉がわかるだろう、人の中にあるものは何か、人に与えられていないものは何か、人はなんで生きるか、それがわかるだろう。そしてそれがわかったら、天に戻ってくるがいい」という課題であった。ミハエルが笑顔を見せる場面は、ミハエルの負うこの課題と関わっている。ミハエルは、貧しい靴屋であるセミョーンと妻マトリョーナとともに暮らす6年の生活の中で、人の中にある愛は不完全であっても神の似像として創られた人間の愛が神の愛を反映するものであること、人間は自分の生きるためになくてはならないものを知ることが与えられていないこと、人間は愛によってともに生きる存在であること、を悟り、天に戻っていく。ここから堀氏は、不信と愛・生と死・共に生きる存在、についての現代的視点を抽出した。

藤掛明氏（総合研究所カウンセリング研究代表・聖学院大学准教授）は、映画を取り上げた。『アナと雪の女王』と『暗殺』から、ありのままの自分をだす、ことの持つ課題について説いた。現代人は「自立した自分」の外見と「未熟な自分」の内面の両面を持ち、特にその内面には怒りや攻撃性が蓄積されている。その怒りや自己表現希求を、最終的には自分らしく生きることにつなげていく課題とその解決を、命がけで自分を救おうとしたアナを抱きしめて泣くエルサ、「もったいつけた最大級の愛　受けてみろ！」と立ち向かう殺せんせージョーンズの姿にみてとった。そこに共通するものは、自己の人生に真剣にかかわってくれる他者の存在の発見、怒りを自覚しコントロールし活用することによる愛と怒りの統合、の視点である、と読み解いた。

村上純子氏（聖学院大学准教授）は、絵本を取り上げた。『わすれられないおくりもの』に登場する、みんなから頼りにされ慕われるアナグマは、秋の終わりに自分の死を悟る、「長いトンネルのむこうに行くよ、さようなら　アナグマより」という手紙を残して。友を失い、悲しみでいっぱいの仲間たち。春が来て、いろいろなことを教えてくれた優しいアナグマの思い出を互いに語り合うなかで、その表情にも幸せな思いがよみがえってくる、という、「死」を迎え入れ、乗り越えるきっかけがなんであるかを深く示してくれるこの作品を、村上氏はアナグマの立場から、すっかり自由になったと感じるアナグマを自己の状況の受容、自分が受け取ってきたもの、残していけるものは何かの省察、自分がいなくなっても続いていくこの世界

にいる自分、を通して死を意識することによる生の再認識の過程を解読した。

質疑応答においては、ストーリーの登場人物に誰の姿をみいだしうるか、また、現代的人間の姿のどこに向き合おうとしているのか、の問いに対して、そのストーリー設定のなかに、他者のニーズを読み込む視点の重要性が指摘された。また、ひとつひとつのことをつみあげていった後で気づく、という発見性の指摘もなされた。愛と怒りについては、その根底には、尊敬して近づきたい思いと、反発して乗り越えていきたい感情とのどちらも認め、どのように統合していけるか、が課題として指摘された。そして日常生活において、いかに本と出会っているかについて、講演者三氏の具体事例が開示されて会がしめくくられた。

（文責：小野　久志［おの・ひさし］聖学院大学大学院アメリカヨーロッパ文化学研究科博士後期課程在学）